
木浚塚 恋愛学園！

桃内土朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木浚塚 恋愛学園！

【Nコード】

N1078E

【作者名】

桃内士朗

【あらすじ】

これは二人の少年が面白おかしく学園生活をすごす話である。

プロローグ（前書き）

少し前に書いていた「木浚塚！恋愛学園」の改良版です。
それを読まなくても十分楽しめるようになってると思いますのでよ
ろしく願います！

ブローグ

うーん、今日はいい天気だし屋上にで昼寝でもするか。こんな天気がいい日に教室で授業なんてうけてたらお天道様への冒瀆と言っても過剰じゃないだろう。

「おう静間^{しずま}！ どこ行くんだ？」

屋上に向かおうと足を向けた時に後ろから聞き覚えのある声がかけられた。

振り返ってみるとそこには制服を着た、静間より頭が一つ分高いスキンヘッドの男が立っていた。

「ん？ 大地^{だいち}か。今から午後の授業をサボって屋上に昼寝に行くところだ」

大地、それがこのスキンヘッドの名前だった。

「お、それなら俺も同行させてもらおう」

着いてくるのか。

スキンヘッドもとい大地が仲間になった！

「さて、行くとするか」

「だな」

二人は学校の階段を上り始めた。

もりしたしずま　こでらだいち
森下静間と虎寺大地、それがこの二人の名前だ。

この物語は静間と大地が恋を知る話である。
二人はちゃんと恋をできるのでしょうか？

プロローグ（後書き）

ここからがんばって話を膨らませるよーw

1話 昼寝と噂

「ん？」

ふと、静間は目が覚めた。

屋上で日向ぼっこもとい昼寝をしていると何か言われた気がしたので身体を起こした。

元から寝癖だらけの髪の毛が更に寝癖がついて大変なことになっている。

「どうした静間」

静間が起き上がったため、横でねっころがっていた大地が気がついたのか質問してきた。

「いや、なんか変なことを言われてるような気がしてな」

静間は気になったことを簡単に言った。

「ふあゝは、気のふえいだろ。ふええにふわはらふふうくしやみだろうしな」

欠伸をしながら言ったようで大地が何を言ったのこよく聞き取れなかった。

実際大地が言ったのは「気のせいだろう」。それに噂なら普通くしやみだろうしな」だ。

「何言ってるか分からないが俺も眠いし同意しておくよ」

静間もすぐに横に戻りまた眠るために横になった。

その時大地が腕を伸ばした状態で寝ていたためちよつと静間の頭が大地の腕に乗った。

ぞくに言う腕枕だ。

なんかもつ非常に危ない構図が出来ていた。

静間と大地は身だしなみとかをもつ少し普通にしていればまあかっこいい分類に入る二人だ。

目に前髪がかかっていていつも目が見えくらい雰囲気を放つ静間、髪型をまともにして少し明るくなればもてるのだろうが当の本人はめんどくさいらしく適当にしている。

そして頭をつるつるにそつてスキンヘッドで見た目はもうヤクザみたいな大地、かなり軽いノリなので色々と問題を起こしている。大地も髪を伸ばせばもてると言つものをスキンヘッドは男のロマンと言つて伸ばす気はないようだった。

二人はだいたいの授業をサボつて屋上か保健室で昼寝をしているためホ 疑惑が噂されている。

噂を流したのは二人の知り合いのある人物である。

それは後ほど出てくるだろう。

さて、そんな噂の流れている二人が屋上で腕枕なんてしているところを見られたら噂が真実と言つことで更に変なことを言われるだろう。

だがそんなことは二人は知らずにすやすやと寝ていた。

そしてそれを写真に収めている一人の女子生徒にも気がつかずに…

…。

2話 ほのぼのライフ（前書き）

今回も別にギャクとかなくほのぼのと送っていきます。

あと前回の作と書き方変えたんだがこれでいいのだろうか？
その辺よろしくお願いします

2話 ほのぼのライフ

「う~~~~ん、よく寝た」

「そうだな」

「俺たち2時間も寝てたな」

静間は携帯の時間を見ながら言った。

「そうだな」

大地はまだ寝ぼけているようで同じ言葉を繰り返しているだけだ。
静間と大地は2時間目が終わってからここに今はもうお昼時である。

「腹減ったな」

「そうだな」

「購買行こうか」

「そうだな」

とりあえずムカついてきたので寝ぼけた大地の首を持って引きずって購買に行くことにした。

途中階段でおかしな声が聞こえてきたが気にせずに静間は歩いていく。

しばらく大地を引きずって歩いていると購買が見えてきた。

歩いていると何か女子たちがこちらを見てひそひそと話していたが静間は気がついていなかった。

「そろそろ手疲れたから離すな」

そう言って静間は首を掴んでいた手を離した。

手が首から離されたことで大地は重力にしたがって倒れていき。

ゴンッ。

鈍い音を立てながら廊下に頭から突っ込んだ。

10秒近く反応が無かったがいきなりシュバ！　と大地が立ち上がった。

シュバって何だよシュバって。

「いってゝ、何すんだよ」

「目ゝ覚めたか？」

「一応な」

頭をふり、痛みを飛ばそうとがんばっている。

「そんな事はどうでもいいや。昼飯何買う？　まあ選べるのは少ないと思うけどな」

静間は大地をほったらかしにしてパンを選び始めた。

二人が購買についた時には人気のパンはすべて売り切れていた。

「俺はどうでもよくないが腹減ったしとりあえず残ってるの買い占めるか」

「全部食べれるのか？　そして金はあるのか？」

「余裕だし金はある」

そう言つて財布から1万円を数枚出した。

万札を出したとき周りの生徒から「おお」と聞こえてきた。その金には赤いしみができていた。

「お前また恨み変われるようなことしたんじゃないだろうか？」

「な」に、かつアゲされてるのを助けて身ぐるみをはいだ」

「十分してるじゃないか。学校にばれてないだろうな」

「大丈夫大丈夫。先生方は俺に逆らえないから」

「うん？ 最後のほう聞こえなかったぞ」

「なんでもないなんでもない」

大地はそう言っただけで宣言どおりパンを買い占めた。

そのため静間はパンを変えなかったたので、とりあえず購買の横にある自販機からカフェオレを二本買って大地の後に続いた。

「俺にもくれよ」

「わかってるって」

2話 ほのぼのライフ（後書き）

次回はがんばって逆を入れて生きたいと思います！
評価があればその文だけががんばります！

3話 ひそひそチラリ（前書き）

連休なのに更新が遅い？

うるちゃーい！

少し遊ぶのに夢中でかけなかっただけだい！

忘れてたわけじゃないぞ！

ほんとだぞ！

3話 ひそひそチャリ

「そういえばさ。さっきからなんか女子からの視線を感じないか？」

大地がパンを食べながら聞いた。

「大地も気づいたか」

「まああからさまに俺ら見られてるしな」

大地が周りの席に視線を送るとすぐに皆目をそらした。さすがに鈍い二人でも見られていることに気づいた。だが二人は鈍いと思ってない。

「さっきは焦ったな」

「確かに。と言うより軽くひいたな」

さっきのことを二人は思い出していた。

騒がしかった女子が二人が教室に入ったとたん、

ピタ！

と、話し声がとまり、教室でグループを作っていた女子全員がいつせいに二人を見たのだった。

この時男子は全員学食に行ったものや学校を抜け出してコンビニで昼飯を買っていたため教室には女子だけだった。

さすがの二人もそのときばかりはひるんだ。

教室のドアを開けると男子はおらず、女子がいきなり話すのをやめてこちらにいつせいに目を向けたのだから。

女子はすぐにグループの話に戻った。

だがさっきの騒がしさとは違って変わってひそひそと話をしては静間と大地をチラ見していた。

そんな女子を静間と大地はどうしようか数秒考えたがめんどくさいし腹が減ったのでスルーした。

そしてそのひそひそ話とチラ見は今も続いている。

正直不気味だ。

たまに女子の方に視線を向けると目が合うがすぐに相手が目をそらす。

そんな状況が2〜3分続いたところに静間がポツリとつぶやいた。

「なんだか面白くなってきた」

「そうだな」

早くもこの状況に慣れてきた二人だった。

チラ。

サッ。

チラ。

サッ。

「よし、目が合った。これで5点だな静間」

「くそ、俺まだ3点だ」

ガラガラガラガラ！

「静ちゃんと大ちゃん」

ビクッ。

パンも食べ終わりもぐら叩き見たいに5分以内に女子と多く目が合ったほうが勝ちと言うルールで二人が遊んでいるとかわいいソプラノボイスの女子が勢いよくドアを開け、二人の名前を呼んで入ってきた。

3話 ひそひそチラリ（後書き）

すいません。

本当は忘れてました。

更新遅れてごめんなさい。

別に誰もこんな駄作期待してないんでしょうがこれからもがんばります。

4話 怒り×怒り

ドアをいきおいよく開け、教室に入ってきたのは見た目が中学1年くらいの身長の子^{よみかわるみ}だった。

その女子の名前は黄泉川留美、静間の友達、大地の幼馴染兼もう一人の幼馴染の彼女だ。

なぜこんな回りくどい言い方かというと、静間と大地は小学校が違い、中学からの付き合いであるのでこんな言い方になっているのである。

その姿を二人は見て、「あゝあ、めんどくさい奴が来た」と言わんばかりの顔をする。

「ああ！ 何よその顔！ めんどくさいのが来たって顔！」

留美が指差してわめきだした。

「してないから黙れ」

軽く疲れているため強気で言う大地。

「大地！ まて！ 今の留美の状態からして近くに奴がいる！」

留美は普段はクールなのだがある人物が近くににいる時だけは子供みたいに明るくなるのである。

つまり今の状態である。

「俺の彼女の留美になんて口聞いてんだあ？」

怒りのオーラを体中にまとった巨大な男子が留美の後ろから現れた。

留美より身長が30cm以上高い男子だった。

この男子は井野内勇^{いのうちいさむ}、一年にしてバレー部レギュラーを取れるほどの運動神経で、成績は学年ベスト3位に入る学力を持ち主だ。

そして大地のもう一人の幼馴染兼留美の彼氏である。

普段はこの四人でつるんだるときは兄貴的な存在だが、留美の事が絡むと軽く暴走してしまう。

それ（暴走中の勇）を確認した大地は、

「ぎゃあああああ！」

叫びながら窓の枠に足をかけていた。

そして最後に、

「この場は任せたあああああ」

と言って飛び降りてしまった。

そう、飛び降りたのである。

言っておくが静間と大地の教室は3階に在る。

普通に窓から飛び降りたら普通はただじゃ済まないのだが、大地は普通ではない。

運動能力がずば抜けているので、こんな高さから落ちてもへっちゃらなのである！

足を滑らせてたような気がするが気のせいだ。

静間は自分に言い聞かせながらとりあえずあれらをどうしようと考え始めた。

視線の先には怒りを溜めた大小の二人がこちらに迫ってきていた。どれくらいすごいかというと、二人のあまりの怒気に、二人が通り返した後の女子達の目じりに涙を溜めている位だった。

俺も大地みたいに逃げようか？

と、静間は考えてみたものの、大地みたいに運動能力がたかくない

静間には無理な芸当であつた。

テストのとき意外にあまり使わない頭をフルに稼働させてみたが、世界はそれほど甘くなかった。

二人は静間の目の前にやってきた。

「静ちゃんにはおしおきをしないとね」

「くつくつくつくつ、俺の留美にふざけた口を聞いたのはこの口かあ？」

「さて、話せばわかる。だから話を聞いて
ギヤアアアア
アアアア！」

そしてその後、ニコリと天使のような笑顔をしているが、瞳の奥には何か冷たいものを潜ませた美少女と、すごい怒りのオーラを身にまとった美男子のおしおきが起こったのは言うまでもない。

4話 怒り×怒り（後書き）

最近眠たいです。

静「それいつもだろ？」

いつもだけどね〜。

更新おくれたにや〜。

静「そりゃ小説も書かずに他人の小説読んできると遅れるだろう」

それは言わない約束でしょ！

静「黙れ！ 言い訳は聞きたくない！」

また今度会いましょ〜。

「スルーかよ」

できれば感想お願いします。

あれば心の燃料となります！

5話 知らなければよかった

「……　で俺はあんなことにをされてさらにホモなんて噂まで流されてるんだよ！」

静間は初めは聞き取れないような声でぶつぶつとつぶやいていたのだが、最後の方はじょじょに声が大きくなり、誰か呪い殺しそうな雰囲気で叫んだ。

その瞬間廊下にいた生徒は蜘蛛の子が散るように逃げていった。ただでさえ見た目が根暗なのにぶつぶつとつぶやいていきなり叫べば当たり前だろう。

なぜ静間がこんなに起こってるかというと、勇と留美からのおしおきが終わった後、静間は半死半生の状態で留美から新聞を受け取って、そこに書かれている文字を見、精神的に大ダメージを食らい真っ白になった。

そこには『熱愛発覚！？　森下静間と虎寺大地は授業をサボって密会！』と書かれていたのである。

横には、サボって静間と大地寝ている写真が張ってあった。寝ているだけならよかったのだが、静間が大地の胸で寝ている写真であった。

それを見てから放課後までの2時間、静間は真っ白な状態だった。そしてHRが終わるとともに起動し、今はある人物に会うために新聞部の部室へ向かっている途中である。

「こんなことができるのはあいつしかいねえ。否、あいつ以外こんな早業できるわけがねえ」

「ひっ」

静間の近くを横切った女子は軽くのどを鳴らして逃げていった。

無理もない。

目を血走らせて廊下を歩く姿は危険人物以外の何者でもない。
さらに時おりぶつぶつと呟いている。
ここまでくれば完全無欠の不審者だ。

「その不審者。すこし止まりたまえ」

5話 知らなければよかった(後書き)

かなり執筆おくれたぜ。

静「短い癖してな」

うるさ〜い！

別にいいじゃないか！

誰もこんな小説楽しみにしてないんだし！

静「自分で言っちゃってるよ」

そうさそうさ。

どうせ俺なんていらぬ子さ。

静「どんどん落ち込んでいく」

大「無視でいいんじゃないか」

静「そだな」

いやあ！

無視しないで。

静「うるさいばか」

それはおいといて、最近秘密基地様の方でコニ・タン先生という方がおもしろそうな企画が建てられたから俺も参加した。

静「お前自分の作品をまず書けよ」

今は参加者メンバーの作品をがんばって読んでるので更新はさらに遅くなる！

静「うおおおおい！」

まだまだ参加者募集してるようなのでURL張りますね！
ではさらば！

『<http://hp23.zero.jp/bbs/kiji.php?uid=himituki&app;dir=382&app;num=3&app;th=&app;unum=1211640598305&app;min=0>』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1078e/>

木浚塚 恋愛学園！

2010年10月28日08時17分発行